



スイス プチ・パレ美術館展

印象派からエコール・ド・パリへ

Renoir et l'art moderne, Collections du Musée du Petit Palais de Genève

2022.7.13水-10.10月



SOMPO美術館
Sompo Museum of Art

モーリス・ドニ《休暇中の宿題》 1906年 油彩・カンヴァス 94×73cm
ASSOCIATION DES AMIS DU PETIT PALAIS, GENEVE

スイス プチ・パレ美術館展

印象派からエコール・ド・パリへ

スイスのジュネーヴにあるプチ・パレ美術館が収蔵する19世紀後半から20世紀前半にかけてのフランス近代絵画をご紹介する展覧会です。創設者である実業家オスカー・ゲーズ氏は熱心な美術蒐集家であり、1968年にプチ・パレ美術館を開設し、そのコレクションを公開しました。プチ・パレ美術館は創設者の逝去後、現在まで休館しており、同館の収蔵品展が日本で開催されるのは約30年ぶりのことです。

プチ・パレ美術館は、ルノワールやユトリロといった有名な作家に加えて、あまり知られていなかった画家たちによる優れた絵画も数多く収蔵しています。世紀転換期のパリでは、印象派や新印象派、ナビ派、フォーヴィスム、キュビズム、エコール・ド・パリなどのさまざまな絵画運動が生まれ、絵画における実験的な表現方法が探究されました。本展覧会は、そのようなフランス近代絵画の流れを、38名の画家による油彩画65点という充実したラインナップによって展望するものです。

みどころ 1

フランス近代絵画の 重要な美術運動をすべて網羅

19世紀後半から20世紀初頭のパリでは、印象派、新印象派、ナビ派、フォーヴィスム、キュビズム、エコール・ド・パリといふ新しい絵画の動向が次々と現れました。本展では全体を6章に分け、それぞれの絵画動向の特徴を分かりやすくご紹介します。

みどころ 2

パリが最も華やいだ時代の さまざまな画家に触れる

近代都市パリで華やかに展開した芸術運動は、一握りの巨匠たちだけではなく、数多くの画家たちによって周辺から支えられていました。本展では、新しい絵画様式の先駆者や、枠に収まらない個性的な画家など、あまり知られていない画家たちの作品も紹介します。

みどころ 3

約30年ぶりに 日本で開催されるコレクション展

スイス プチ・パレ美術館のコレクションのみの展覧会は、日本では約30年ぶりの開催となります。同館は1998年に休館して以降、現在も一般には公開されていません。そのため本展は、現地でも見ることのできない傑作を鑑賞することのできる貴重な機会です。

1

印象派

L'IMPRESSIONNISME

【出品作家】

アンリ・ファンタン＝ラトゥール
オーギュスト・ルノワール
アルマン・ギヨーマン
ギュスターヴ・カイユボット

19世紀後半のパリ、伝統的な主題と表現手法を拒絶し、新たな絵画を探求する画家たちがいました。1874年に彼らは権威あるサロン(官展)に対抗すべく、自分たちで展覧会を開催しました。その際に受けた皮肉まじりの批評をもとに、この画家たちは印象派として知られるようになります。印象派の画家たちは、屋外の自然風景や都市の景観、日常生活の光景などを好んで主題に選びました。そして、なるべく絵具を混ぜ合わせずに、原色に近い色を画面上に並べる色彩分割の手法を、軽やかなタッチとともに用いて描きました。それによって、光の輝きや明るさ、空気感を表現しようとしたのです。この章でご紹介するルノワールやカイユボットの作品には、そのような鮮やかな色彩や、絵具を編み込むような筆遣いといった印象派特有の表現が見られます。



広報用画像 1

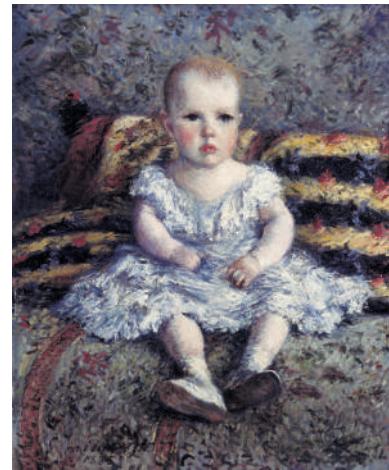
オーギュスト・ルノワール

《詩人アリス・ヴァリエール＝メルツバッハの肖像》

1913年 油彩・カンヴァス 92×73 cm

ASSOCIATION DES AMIS DU PETIT PALAIS, GENEVE

晩年、リウマチの療養をかねて南仏の街カーニュに暮らした時期に制作した肖像画。当時、ルノワールは肖像画から距離をおいており、本作の依頼にもあまり乗り気ではなかったそうです。しかし、女性のまとった白いサテンのドレスを見ると、その美しさに感動し、その艶やかな光沢ある質感を巧みに描き出しました。



広報用画像 2

ギュスターヴ・カイユボット

《子どものモーリス・ユゴーの肖像》

1885年 油彩・カンヴァス 73×60 cm

ASSOCIATION DES AMIS DU PETIT PALAIS, GENEVE

風景を題材とすることの多い印象派の手法を肖像画に応用した作品。顔の表情は、細かなタッチと微妙な色遣いで表されるのに対して、ワンピースはより大胆なタッチと鮮やかな白と青で描かれています。周囲に多彩な模様の入った布地と壁を配置することで、子どもの姿を引き立てています。

2

新印象派

LE NÉO-IMPRESSIONNISME

【出品作家】

アルベール・デュボワ＝ビエ アシール・ロージエ
シャルル・アングラン テオ・ファン・レイセルベルヘ
アンリ＝エドモン・クロス ジョルジュ・レメン
マクシミリアン・リュス ニコラス・アレクサンドロヴィッチ・タルコフ

1884年、因習的なサロン(官展)に不満を抱いた画家たちは、無審査で作品を発表できる場として最初のアンデパンダン展を開催しました。彼らの中には、後に新印象派の主要なメンバーとなるスーラやシニャック、クロスなどいました。新印象派の画家たちは、印象派の色彩分割を基に、色彩と光を扱う科学的理論を取り入れました。そして光の表現を探求する中で、細かな点で画面全体を均一に覆う点描表現と、色彩の対比による視覚的效果を組み合わせました。この分割主義と呼ばれる手法は、平面性を強調し、奥行きの表現を手放すことにもつながりました。新印象主義は、パリのアンデパンダン展、そしてベルギーのブリュッセルで設立された20人会展を主な活動拠点として、国際的に展開しました。またファン・ゴッホやゴーギヤン、ナビ派などの他の絵画動向と交わることで、新印象派の画家たちは科学的理論を厳密に応用するという制約を超えて、より大胆なタッチと色彩表現を探求していきました。



広報用画像 3

アンリ＝エドモン・クロス

《糸杉のノクチューン》

1896年 油彩・カンヴァス 65×92 cm

ASSOCIATION DES AMIS DU PETIT PALAIS, GENEVE

クロスは1891年頃に新印象派の表現を取り入れました。当初、分割主義と色彩対比の理論に厳密に従っていましたが、その後、鮮やかな、強烈な色彩によって光を表すようになりました。本作では、糸杉や舟を幾何学的な形として描き、その同じ形を反復させることで、装飾的で律動的な画面を構成しています。



広報用画像 4

アシール・ロージエ

《花瓶の花束》

1894年 油彩・カンヴァス 60×73 cm

ASSOCIATION DES AMIS DU PETIT PALAIS, GENEVE

花々が花瓶から大きく突き出し、テーブルの上に散らばることで、左右非対称の構図の中でも注意深く均衡がとられています。新印象派に特有の非常に細かな点描によって、鮮やかな赤い花から、背後のくすんだ色調の壁に至るまで、全てが丁寧に描写されています。

3

ナビ派と ポン＝タヴァン派

LES NABIS ET L'ÉCOLE DE PONT-AVEN

【出品作家】

ポール＝エリー・ランソン
エミール・ベルナール
モーリス・ドニ

ポン＝タヴァンは、フランス北西部のブルターニュ地方に位置する小さな村です。ここに滞在したゴーギャンとその周りにいた若い画家たちをポン＝タヴァン派と呼びます。彼らは伝統的な絵画表現からも同時代の印象主義からも距離をとり、輪郭線で色面を囲む平面的な表現方法を用いて、自身の想像力と描かれるものの外観を統合しようと試みました。その影響を受けたパリの若手画家たちは、ナビ（ヘブライ語で「預言者」の意味）派を結成しました。彼らは19世紀末の象徴主義の流れに属し、現実をそのままに描くのではなく、装飾的な表現を追求しました。また、神秘主義や宗教、文学に関連した内容を好み、日常生活の一場面を描く際にも、知的、精神的な内容を織り込むことが多くありました。ナビ派の理論家として知られ、宗教に強い関心を抱いたドニにとって、重要な主題は妻と子供たちでした。ドニはブルターニュ地方のペロス＝ギレックに別荘をもち、その邸宅や近くの海岸で憩う家族の姿を描きました。



広報用画像 5

モーリス・ドニ

《休暇中の宿題》

1906年 油彩・カンヴァス 94×73 cm
ASSOCIATION DES AMIS DU PETIT PALAIS, GENEVE

ドニは家族の日常生活を主題とすることが多く、本作では、テーブルの周りに集まる妻マルトと3人の娘たちの姿を描いています。三角形をなす安定感のある構図と、全体を満たす華やかな色彩が、穏やかで温かみのある家庭の雰囲気を伝えています。



広報用画像 6

モーリス・ドニ

《ペロス＝ギレックの海水浴場》

1924年 油彩・カンヴァス 97×125 cm

ASSOCIATION DES AMIS DU PETIT PALAIS, GENEVE
1900年頃から、ドニはイタリア美術からの影響を受け、古典主義を取り入れた独自の作風を追求しました。ブルターニュ地方のペロス＝ギレックに別荘をもつたドニは、本作で、同地の海岸で水浴する人々を、古典美術を連想させるような量感豊かな裸体表現で表しています。

4

新印象派から フォーヴィスムまで

DU NÉO-IMPRESSIONNISME AU FAUVISME

【出品作家】

ルイ・ヴァルタ
アンリ・マンギャン
モーリス・ド・ヴラマンク
ジャン・ビュイ

ラウル・デュフィ
キース・ヴァン・ドンゲン
シャルル・カモワン

新印象派の画家たちは、厳格な分割主義の原理から次第に遠ざかり、細かい点描に代わる長めのタッチや自由な色彩表現を取り入れました。この表現の幅の広がりから、のちのフォーヴィスムや表現主義に向かう動きが展開します。1905年、パリで開催されたサロン・ドートンヌでは、一群の若い画家たちによる絵画がセンセーションを巻き起こしました。大胆なタッチと鮮やかな色彩を特徴とする彼らの作品が「野獣（フォーヴ）」と批評されたことから、フォーヴィスムという呼称が生まれました。フォーヴィスムの主要な画家たちの中で、象徴主義の画家に学んだマティスやカモワンらは新印象派の分割主義に感化され、さらなる実験的表現を模索しました。一方、パリ郊外の街シャトーで活動したドランとヴラマンクは、ファン・ゴッホやゴーギャンらの重々しい色彩と激しい筆遣いを受け継ぎました。フォーヴィスムは数年間の活動の後に終焉を迎え、画家たちはそれぞれ独自の道を歩むようになります。



広報用画像 7

モーリス・ド・ヴラマンク

《7月14日 踏切、パリ祭》

1925年 油彩・カンヴァス 60×73 cm

ASSOCIATION DES AMIS DU PETIT PALAIS, GENEVE
©ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2022 E4599

初期にフォーヴィスムの影響下にあったヴラマンクは、第一次世界大戦への従軍後、暗く重々しい色調の絵画に転向しました。本作では、建物や人物が単純な形体として描かれ、大胆なタッチによる白雲や、国旗や踏切の赤色が画面に精彩を与えています。



広報用画像 8

シャルル・カモワン

《バラ色の布の静物》

制作年不明 油彩・カンヴァス 73×92 cm

ASSOCIATION DES AMIS DU PETIT PALAIS, GENEVE
©ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2022 E4599

他のフォーヴィスムの画家たちに比べ、カモワンは穏やかな色彩とタッチを用いました。フォーヴィスムが形成される以前からセザンヌと親しく交流しており、本作におけるモチーフの形体と色面による空間構成には、セザンヌの静物画からの影響が認められます。

フォーヴィスムから キュビズムまで

DU FAUVISME AU CUBISME

【出品作家】
 ジャンヌ・リジ=ルソー
 マリア・ブランシャール
 アルベール・グレーズ
 ジャン・メツアンジエ
 アンリ・エダン
 アンドレ・ロート
 ロジェ・ビシェール
 マレヴァ

フォーヴィスム最後の展覧会とされる1907年秋のサロン・ドートンヌでは、セザンヌの回顧展も併せて開催されました。これがきっかけのひとつとなり、画家たちの関心は色彩から、空間と量感の表現へと移っていました。キュビズムを牽引したピカソらの画家たちは、複数の視点から対象物を捉え、そのイメージを組み合わせることで、現実を絵画上に再構築することを試みました。分析的キュビズムの時期(1910-1912)には、モチーフの形体は多くの面に分解され、色彩は黒や灰色、白などに限定されました。そして次第にモチーフと周囲の空間との境目は曖昧となり、やがて溶解していきました。総合的キュビズムの時期(1912-1915)には、モチーフの形体と色彩が復活し、壁紙や新聞の切り抜きを貼り付けて、絵画に現実の要素を導入する試みが行われました。その後に現れた古典に立ち返ろうとする芸術的気運や、文学など他の芸術分野との関連を通して、キュビズムはさらに多様な展開を示すことになりました。



広報用画像 9

マリア・ブランシャール

《静物》

1917年 油彩・板 60×70 cm

ASSOCIATION DES AMIS DU PETIT PALAIS, GENEVE
 スペイン出身の女性画家ブランシャールによる作品。ポットやカップ、箱などを異なる視点から捉え、そのイメージを組み合わせることで各モチーフを表しています。それぞれのモチーフは、それが何であるか明白に分かるように描かれており、互いに入り混じらないように輪郭線と色彩で区分されています。



広報用画像 10

ジャン・メツアンジエ

《スフィンクス》

1920年 油彩・カンヴァス 116×89 cm

ASSOCIATION DES AMIS DU PETIT PALAIS, GENEVE

メツアンジエはキュビズムの画家、理論家として活躍しました。1920年代になると、ビュリスムの絵画理論に共感し、簡略な画面構成、明瞭な輪郭をもつ単純な形体、平塗りの色面を特徴とする作品を描きました。本作中のスフィンクスと古代風の女性像は、当時の美術界における古典回帰の傾向を暗示しています。

ポスト印象派とエコール・ド・パリ

LE POST-IMPRESSIONNISME ET L'ÉCOLE DE PARIS

【出品作家】

テオフィル=アレクサンドル・スタンラン
 フェリックス・ヴァロットン
 シュザンヌ・ヴァラドン
 ジョルジュ・ボッティエニ

アンдре・ドラン
 モーリス・ユトリロ
 藤田嗣治
 モイズ・キスリング

19世紀後半から20世紀初めにかけてのパリでは、印象主義を始めとする前衛芸術が多様な展開を見せた一方で、それらから距離をおいた画家たちもいました。特に両大戦間の時期を中心に、パリで活動したフランス国内外出身の芸術家たちの中で、特定の芸術運動に属さず、明確な芸術上の主義や信条を立てない画家たちを総称してエコール・ド・パリと呼びます。

第一次世界大戦前にはモンマルトルが、戦後にはモンパルナスが若手芸術家の主な拠点になりました。彼らの多くは貧しい人々や労働者、庶民に共感し、その日常生活を描きました。エコール・ド・パリの画家たちが主に活動した1920年代には、装飾芸術的重要性が注目されるとともに、古典絵画に立ち返ろうとする「秩序への回帰」と呼ばれる傾向がありました。画家たちは、そのような同時代の芸術思潮から影響を受けつつ、複数の絵画様式を融合させるなどの試みを通して、それぞれ独自の絵画表現を探求していました。



広報用画像 11

テオフィル=アレクサンドル・スタンラン

《猫と一緒に母と子》

1885年 油彩・カンヴァス 90×58.5 cm

ASSOCIATION DES AMIS DU PETIT PALAIS, GENEVE

チョコレートと紅茶の販売店のポスターの元となった油彩画。ティー・カップとホット・チョコレートのカップとともに、スタンランの妻と娘が描かれています。猫はスタンランが好んで取り上げたモチーフで、本作でも猫の後ろ姿が手前に大きく配置されています。



広報用画像 12

モイズ・キスリング

《サン=トロペのシエスタ》

1916年 油彩・カンヴァス 90×110 cm

ASSOCIATION DES AMIS DU PETIT PALAIS, GENEVE

第一次世界大戦の従軍中に負傷したキスリングは退役すると、後に妻となるルネとともに、南仏サン=トロペ近郊のガッサンを訪れました。滞在中の二人の姿を描いた本作は、キスリング特有の作風が確立される以前の初期作品で、セザンヌやフォーヴィスムの影響を強く示しています。

スイス プチ・パレ美術館について

スイス、ジュネーヴにあるプチ・パレ美術館は、1968年に実業家オスカー・ゲーズ氏(1905-1998)のコレクションを公開することを目的に設立されました。チュニジア出身のゲーズ氏は、イタリアでゴム製品の製造業を始め、その後、事業を拡大して成功を収めました。精力的に事業経営に取り組むかたわら、ゲーズ氏は骨董店を巡って美術品を購入し、絵画にも関心をもっていました。そして1950年代に相次いで家族を失ったことをきっかけに、美術に情熱を注ぎ、本格的に作品を蒐集するようになります。

ゲーズ氏は当初、ベル・エポックの時代の画家たち、とくにモンマルトルの風俗を描いたユトリロやスタンランの作品を好んで蒐集しました。その後、新印象主義やフォーヴィスムへと関心の幅は広がりました。多忙な業務の合間にも画廊を訪れ、当時、存命中だった藤田やキスリングなどエコール・ド・パリの画家たちと知り合い、多くの作品をコレクションに加えました。

プチ・パレ美術館のコレクションは、19世紀後半から20世紀前半のフランス近代絵画を中心としていますが、それは次のような独特の観点から形成されました。まず、ゲーズ氏の実業家としての経験から、蒐集する作品の価値と購入価格について、独自の明確な基準が設けられていました。当時、すでに巨匠とされる印象派の画家やマティス、ピカソなどの作品は高額で取引されていました。ゲーズ氏は高額な作品を購入するよりも、一人ひとりの作家による、まとまった数の作品を所有したいと考えていました。さらに、自分の審美眼に自信をもっていたゲーズ氏は、不当に過小評価されてきた画家たちを世に出すことに使命感を抱き、認知度の低い画家たちや、歴史の中で見過ごされてきた女性の画家たちの作品を多く蒐集しました。

プチ・パレ美術館のコレクションの特徴は、二度の世界大戦を経験し、波乱に満ちた人生を送ったゲーズ氏独自の視点が反映されている点にあります。同館は現在休館中ですが、ゲーズ氏の掲げた「平和に奉仕する芸術」というモットーの下、国内外の展覧会にコレクションを出品することで国際平和と相互理解への貢献を続けています。



晩年のオスカー・ゲーズ



スイス プチ・パレ美術館

開催概要

展覧会名 スイス プチ・パレ美術館展 印象派からエコール・ド・パリへ

会 場 SOMPO 美術館 〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1 新宿駅西口より徒歩5分

会 期 2022年7月13日(水)～10月10日(月・祝)

休 館 日 月曜日(ただし7月18日、9月19日、10月10日は開館)

開館時間 午前10時～午後6時(最終入館は午後5時30分まで)

観 覧 料 一般:1,600円、大学生:1,100円、高校生以下無料

※チケットは公式電子チケット「アソビュー!」(日時指定券)、ローソンチケット、イープラス、チケットぴあなどでお買い求めいただけます。詳細は美術館ホームページをご確認ください。

※身体障がい者手帳・療育手帳・精神障がい者保健福祉手帳をお持ちの方はご本人とその介助者1名は無料、被爆者健康手帳をお持ちの方はご本人のみ無料

主 催 SOMPO 美術館、フジテレビジョン

協 賛 損保ジャパン

後 援 在日スイス大使館、新宿区

企画協力 ホワイトインターナショナル

美術館
ホームページ <https://www.sompo-museum.org/>

お問合せ 050-5541-8600(ハローダイヤル)

プレスお問合せ

「スイス プチ・パレ美術館展」広報事務局(ウインダム内)

TEL:03-6661-9447 FAX:03-3664-3833 e-mail:sompo-m-pr@windam.co.jp 〒103-0014 東京都中央区日本橋蛎殻町1-28-9 ヤマナシビル4階